

麻しん(はしか)の流行と予防対策

城里町国保七会診療所 上井 雅哉

麻しんの患者数が増加しています。流行を抑制するための予防対策についてお話しします。

■麻しん患者の急増

平成31年2月、関西地方と東海地方を中心に、麻しん患者が急増していると報告されました。2月下旬以降、明らかな集団感染は見られないものの、関東地方においても感染が報告されました。茨城県では3月上旬までに7名が感染しています。

全国の累積患者数は2月末までに平成30年の報告数を上回り、最近7年間で最も多かった平成26年の報告数を超える勢いで増加しています。

■感染力の強い麻しんウイルス

麻しんは、麻しんウイルスによる急性全身感染症です。潜伏期間は10日程度で、発熱や咳、鼻水の症状が現れ、3～4日後一時的に解熱傾向を示しますが、再び39℃以上の高熱が出るとともに暗赤色の発疹が出現します。

麻しん感染による肺炎や脳炎を発症した場合、死亡することがあります。成人が初めて麻しんに感染すると、小児よりも重症化することがあります。妊婦が感染した場合、流産や死産の危険性が高まりますので、注意が必要です。

麻しんは、飛沫感染、接触感染に加え、空気感染するため、手洗いやうがいでの予防がしにくく、インフルエンザよりもはるかに感染力が高いといわれています。潜伏期間や発疹が出現しない段階で人と接触した場合でも、感染が拡大することが予測されます。

■麻しんがなぜ日本で流行したのか

麻しんの感染が世界で広がっている中、ワクチン施策の効果もあり、日本は平成27年に世界保健機関(WHO)により、麻しんの排除状態にあることが認定されました。近年、国内で感染が確認され

ているのは、海外から持ち込まれた麻しんウイルスによるものと考えられています。今後、海外渡航者や訪日外国人の増加により、ウイルスが持ち込まれる機会も増えると考えられるため、対策が必要です。

広報しろさと3月号で、麻しん・風しん・おたふくかぜ3種混合ワクチン接種の副反応への懸念から、麻しん・風しんワクチンの定期接種を受ける機会がなく、麻しん・風しんの抗体を持たない成人(現在39～56歳の方)の間で風しんの感染が広がったことを紹介しました。同様の理由で、麻しんの感染が広がる危険性があります。

かつては、麻しんに一度感染すると二度と感染しないとされていました。再感染の患者が確認されるようになりました。麻しんの流行がしばしば発生していた頃は、麻しんウイルスに接することで、自然に免疫が強化されていました。ワクチン接種の効果で、流行することが少なくなると、免疫を強化する機会を失い、免疫が低下すると一度感染した人やワクチンを接種した人でも発症することがあります。

■麻しんの予防対策

麻しん予防のカギはワクチン接種です。

小児の麻しん・風しんワクチンの定期接種は特に重要です。また、麻しん・風しんワクチンの定期接種を受ける機会がなかった方は、積極的にワクチン接種を受けましょう。

妊娠中の方は、ワクチン接種ができません。感染を避けるため、妊娠24週までは人混みに近づかないようにしましょう。



春の全国交通安全運動(5月11日～20日)

～5月20日は交通事故死ゼロを目指す日です～

○運動のスローガン

「あぶないよ 画面見ないで 前を見て」

春を迎え、新たに通学する子どもたちの交通安全指導や、高齢者等がかかわる交通事故を防止するため、交通安全運動を実施します。

交通事故を未然に防ぐため、交通ルールを守り、正しい交通マナーを身につけましょう。

問合せ 町民課 ☎029-288-3111(内線112)

《運動の重点項目》

- ①子どもと高齢者の安全な通行の確保と、高齢運転者の交通事故防止
- ②自転車の安全利用の推進
- ③すべての座席のシートベルトとチャイルドシートの正しい着用の徹底
- ④飲酒運転の根絶